



切支丹と藝術

京都帝大教授
文學博士

濱田耕作

私は「切支丹と藝術」といふ浮瑛たる題を掲げてをるのであります。始めかういふ風な題でやつて見ないかといふ話でありましたが、これは少し變だから、もう少し何とかが變へたらうと思つて居つたのですが、さうもよい題が浮んで来ないので、遂にそのまゝかういふ題になつた次第であります。のみならず、私は平素古い事を研究致してをるのであります。それはすつと古い上古のものを取扱かつてをるのであります。切支丹或はその時代の文化に關するものになりましては、少し新しすぎるのであります。私の如きは此の方面においては素人の側に數へられる外はないのであります。しかし、切支丹の藝術に就いても多少興味を持つてゐないことはないのでありますから、さうかくお話しすることになつたのであります。なほ一つ茲にお断りして置かなければならない事は、私は丁度最終の講演會に當てられたため、私が折角はうと思つてゐたことも、皆先の人々がいつてしまはれたといふ具合で、私の折角考へつたことも、先輩にいられてしまつたことになつてしまひました。併しこれは今更仕方がないので、もしも前の方の言はれた所と同じやうなことを私がしやべつた場合には、學者の間にさういふ説が一致してゐるのであつて、前の人の説を私が確め、また私の説を前の方が確められたこと、御承知を願ひます。もしまた説が互に違つてをることがあれば、それは私の方の説が間違つてをること御考へになるか、或はまた、兩説あるといふやうに御考へあるやうに願つて置きます。またことに「切支丹」と申すのは今日まですつと行はれてをるところの基督教といふ廣い意義ではなく、足利時代の末期に日本に入つて參り、そして徳川初期に鎮壓された、その間の日本における初期の基督教を指すのであります。極く短い間の切支丹宗であります。しかしながら、後の方の「藝術」といふ文句は、これは建築、彫刻、繪畫からあらゆる工藝品まで引つくるめて廣く含んでゐるものと御承知を願ひます。それをわづかの時間の間で極く簡單に要領を得れば結構であります。或は要領を得ないかも知れないと恐れる次第であります。

さて申すまでもないことですが、基督教といふものが今から二千年はご前に、パレスティンに起り、ローマに這入つた時分は、此の宗教は——何れの宗教も始めは皆さうであります——頗る非藝術的なものでありまして、従來のギリシヤ・ローマの藝術的である宗教に反抗して起つたころの、むしろビュリタンの性質のものでありました。もちろん、偶像といふものは作らない。偶像を作るものを排斥する。他の彫刻や繪畫の類もなるべく作らない。また會堂の如き大きな建築は作らない。また始めは極く微々たる宗教でありましたから、個人の家で集會をやり、或はローマ皇帝の迫害を受けた時などは、「カタコンベ」即ち地下に穿つた墓の中で、集會をやるといふ具合で、堂々たる會堂を作らない。後世歐洲に現はれたころの「ゴシック」式建築や或は「ルネッサンス」時代の大きな建築のやうなものには必要がなかつたのでありまして、またさういふものを持たないころに、基督教の價値があつたのであります。併し一方には又矢張りこの宗教もギリシヤ・ローマの精神、即ち「ヘレニズム」の影響以外に全く獨立することは六ヶ敷く、例へばローマの「カタコンベ」の中に見るやうに、若干の宗教的繪畫や、又石棺の彫刻に現はされてゐるやうな宗教的彫刻の要素もありません。しかもその手法は矢張り古來のギリシヤ・ローマ風のものを採用したのであるのは面白い現象であります。然るに此の原始基督教も其後數百年を経過致しましては、いつしか全く藝術に交渉の深い貴族的の宗教となりおほせスツカリ其の趣を變じてしまつたのであります。これには東方ビザンツに於けるギリシヤ風の根強い土地に發達した東方教會の影響など、いろいろ原因もありませうが、とにかく中世に於ける「ゴシック」藝術なるものが、あの様な特殊の色彩を具へて、建築に、彫刻に、繪畫に、あらゆる方面に著大なる發達を遂げたのであります。

ミミロがやがて文藝復興期になりますと、此の時代はギリシヤ・ローマの精神が復興した時代でありまして、それによつて基督教は一層美術的色彩を加へ、宗教は寧ろ美術に隸屬するといふ様な形勢になり、眞の宗教的精神といふものは

なくなつたかのやうに見えるのであります。この時代に出て来たのは、諸君もよく御承知の、かのミケロアンジェロ、ラファエルなどであります。彼の人の作つた宗教畫などは、むしろ純粹の美術品といつてもよい位であります。これは恰度年代から申しますと、大體十五世紀の始めの頃でありまして、この氣運が十六世紀に一層盛んになり、十七世紀に至つて、稍々衰へ氣味になつたのであります。ところが、日本へ這入つて来た基督教といふものは丁度この十六世紀の半ば即ち一五四九年にフランシスコ・サヴィエルによつて始めて傳へられたのであります。われわれはこの點から見まして、日本における初期の切支丹といふものは、美術的の宗教であつたに直ちに思ひ付くのであります。しかもそれがスペインやポルトガル或はイタリーといふやうな、今日においても當時の美術品を澤山持つてをるころの國から這入つて来たといふことを、第一に頭に入れて置かなければならないのであります。

二

いま申しました如く、この文藝復興期の大勢に風靡せられて居つた國々から、我が邦へ切支丹宗が這入つて暮りましたのでありますから、これに附隨して當代の美術、特に宗教美術が輸入せられたと考へるべきであります。しかしそれと同時に他方われわれは又その時分に遙々三千里外の絶域に布教に來たころの宣教師自身は、むしろ「ルネッサンス」時代の美的生活に醉つてゐる社會は少し遅つた、むしろ美術を重んじない連中の人であつたといふことを考へて置かなければなりません。まづ始めてやつて來たころのザヴィエル師、この人はゼスイット派の宣教師であつて、彼はこの團體の創立者の一人でありまして、イグナチウス・ロヨラと一緒に一五二三年この派を創立したのであります。そのゼスイット會の團體の創設者の一人なるザヴィエルが日本へ來たのであります。そしてこのゼスイット派といふのはどういふ風の宗派であるかといふに、これは今までの中世において基督教がだんだん腐敗して來て、その結果ドイツのマルチン・ルーターなきが出て、遂に「プロテスタント」即ち新教が起つたのであります。この際ローマ公教會を擁護し、この公教會の

反抗者に當つて、新教で失つたところの信仰の版圖を取返し、ひかり之を歐洲で取直すのみならず異教徒の遠い國——東洋——さういふところに布教して、そこに神の國を建設しやうといふ精神から起つた獨身、清貧、服従を旨としてやつて行かうといふ宗團でありました。従つて美術のやうな贅澤品は、きつちかといふに重く見ない方の宗旨でありました。但し後にはだんだんさういふ宗旨が墮落したのか、或は進歩したのかは知りませんが、贅澤になり美術的になつてしまひました。今日ローマへ行つて見ますとセスイット派の本山の建物が、丁度日本大使館の前にあります。この「ヂェズ」の會堂は實に立派な會堂で、金壁燦爛たる裝飾があり、ロヨラが此の宗團を建てた時の精神は、甚だ違ひものであるかのやうに見受けられます。

また日本へ入つて來た宗派の他の一つはフランシスコ派ですが、この派の創立者フランシスコといふ人は、イタリーのアシンシに起つたのでありますが、これは「ヂェスイット」派よりもズツと古く一二三三年に出來たのであります。併し矢張り、清貧、服従、純潔を三大「モットウ」として起つたのであります。托鉢僧團でもいふべきものであります。そのほかドミニコ派、オーガスツス派の僧侶も若干來たのであります。これらも何れも大同小異の主義のものであります。始めは彫刻、繪畫、さういふものに無頓着の宗派であります。たゞへ本國においてはだんだん贅澤になり美術的になつて行つたにせよ、遠方の日本或は東洋に傳道に來た宣教師だけは、そんなことを考へない人々であり、また考へる道もなく、たゞ熱心に神のために道を説き、新しい神の國をこの絶域に築き上げやうといふ念に專一でありまして藝術の方面には甚だ無頓着な宗教家であつたのであります。それです。大體において美術的な「ルネッサンス」時代に日本へ基督教が傳道せられたに關らず、比較的さういふことに無關係であり、それに重きをおかない宗派宣教師がやつて來たのでありますから、われわれは西歐の切支丹の日本に及ぼした影響といふものは、さう大したものではなかつたらうといふ豫想を始めから持たなければならぬのであります。それで私はこれから日本におけるこの切支丹の藝術について建築、彫刻、繪畫、工藝といふ風に、項を分つて、その大要をお話したいと思ふのであります。

三

然るに此の切支丹の藝術に關する遺物といふものは、今日傳はつてゐるものは大變少ないのであります。この開國文化展覽會にも多少出品せられてゐないではありませんが、それは當時の作品の實に九牛の一毛にも過ぎないのであります。多くは徳川の初期に耶穌教祭歷のために壞されたり、匿されたりしてなくなつてしまつたのであります。又遺物以外におきまして、さういふことについて書いた文獻も甚だ少ないのであります。それ故われわれは極く僅かの書きものも、極く零細な遺物もに由つて、推測を加へるよりほかはないのであります。まづ第一に建築物について申しますが、この建築物は他の美術品と違つて、これを本國から持つて來ることができない。モデルなら持つて來られますが、大きな伽藍御堂をヨーロッパから持つて來ることは不可能であります。また當時の記録殊に、宣教師の書翰などを見ましても、建築の技師を同行し來たといふことは書いてない。それですから他の繪畫、彫刻とは趣きが違ふを見なければなりません。それで私はこの切支丹の連中によつて造られた會堂禮拜所といふものは、さういふ建築であつたかといふことを、少し調べて見やうと思ふのであります。

これは多く當時の宣教師が本國へ出したところの通信書翰などによるのであります。これによる、織田信長の時にオルガンチノといふイタリー生れの宣教師が安土で信長から土地を買つて、教會堂を作つたのであります。彼の手紙（一五八五年十月）を見ますと、木造の二階建て、日本式の建築であることが推測せられるのであります。また次に天正四年に京都に造られた大きい會堂、南蠻寺と稱せられたものであります。この南蠻寺の建築の模様を考へますと、これまた二階建ての木造建築、下階は集會所に使ひ、上階は宣教師即ち「パテレン」の住居になつてつたといふことであります。そしてこの會堂は大分大きな建築だといふので、見物人も随分あり、そして珍らしい會堂ができるといふので、皆眼を眩つたといふのであります。又その棟木を上げるのに六百人の力を要した。二階には六つの美しい部屋があり、それは大き

くはないが頗る技巧を盡した建物である、非常に立派に建築せられたのであつた、日本人はそれを見て頗る驚嘆したといふことが宣教師フロイスの通信（一五七七年九月）に出てをるのであります。そしてまた彼のオルガンチノといふイタリヤ人の「バテレン」は建築上にもや、心得のある人を見え、その人の工夫考へも此の建築に多少入つてをるゝあります。しかしましたその手紙の一部には、石の細工、木の細工といふものが非常に精巧にできてをる。これは京都の都の職工に造らした、これに及ぶものはないと書いてあります。して見るにもちろんこれを造つた大工、石工は日本人である。それですからオルガンチノ師がたゞへ西洋風の「デザイン」をしても、當時何らさういふ建築法に練習もない素養もない大工がよく西洋風の建築を造り得るゝは思はれないのでありますから、それは大體において日本式の木造建築であり、そして浄土宗或は浄土真宗のお寺お堂のやうなもので、それに多少天守閣のやうな樓閣式を加味してあるが、大體はもゝより日本式で疊を敷いてそこへ信者が集つて禮拜したものと思はれるのであります。決して當時西洋に行はれた文藝復興期時代の建築なごが、そのまゝ、こゝちに造られたごか、或は「ゴシック」式の建築が移し植ゑられるといふごは考へられないのであります。たゞし内部の細かいごころの設備や裝飾なごには、多少西洋の耶蘇教の分子が入つてゐるたごご推し測るごごが出来ます。そしてその大體はこの展覽會にも出て居る「南蠻屏風」なごに見えてゐる様なものかご想像せられます。あの屏風には入船出船の圖がある。その中で入船の一隻には疊を敷いた上で宣教師が祭儀をやつてをるごころの圖があります。これは大體真相を描いたものと思はれます。けれども出船の方の會堂の圖は、支那建築か印度建築かエタイの知れない建築が描かれてあります。これは西洋ではこんな風な會堂である。ごにかく日本のごは違つてゐるものに違ひないご、空想によつて描いたものであるご思ひます。もしもあれが西洋風の完全な會堂が日本にできてをつたならば、決して印度か支那かわからぬやうな變な圖を造らないで、純粹の西洋風のものを描いたに違ひないご私は思ふのであります。要するに、當時の切支丹の會堂の建築は日本歴數の二階家のお寺の本堂みたやうなものでありまして、内部は桃山時代、足利の末から徳川初期であるから、當時の立派な寺院宮殿ご同じやうな金碧燦爛たる襖、欄間なごの裝飾が幾分か用ひら

れてあつたかも知れないと思ひます。なほ私のこの考へを確めるよい材料は、永見徳太郎氏所蔵の南蠻堂の圖を描いた扇面であります。それには全く三階の天主閣風の日本建築が現はされてゐるのであります。

ところが、に問題となるのは、その説に反對するやうな材料がある。それはボンカムベニー・ルードヴィジといふ人の日本の古い時代の二人の使節がヨーロッパに行つたことを書いた書物のうちに、引いてある有馬、府内、安土、臼杵かういふころにあつた「カサ・プロフェツサ」學林、修道院「セミノリオ」の建築の圖であります。これは極く粗末な木版繪であります。これを見るに三階造りの窓を並べた家であり、高い鐘樓「カムベニー」なども立つて居ります。これはどうしても西洋造りで、かういふ建築は木造でもできないことはないが、さつちかさいへば煉瓦とか石造でなければできない側の建築であります。ところが、こんなものが果して實際できたでありますか。尤もこれは或は彼の安土や京都における耶蘇教の會堂よりも後にできたものであると考へられますが、私は大體において矢張り當時「セミノリオ」や「コレジオ」の建築なごは、やはり日本式の建築であつて、今申したボンカムベニー・ルードヴィジの書物にある木版畫は架空的の繪である、でたらの想像繪であるに斷定し度いと思ひます。今日でも田舎の小さいころへ行けば耶蘇教でも普通の家を借りて説教してゐる。朝鮮に行つても田舎の天主教の會堂は、在來の朝鮮の家の様式で、たゞ其の屋上に十字架が載つてゐるくらゐのものであります。さういふものが日本にできた。京都においてさへ今いつた通り南蠻寺の記事の如く、日本式建築であつたに推定せられるのでありますから、そのほか各地にあつたころの各種の宗教的建築、或は山口或は高槻その他にあつたころの會堂の如きも、凡て大體は日本式の建築であつたに私は信するのであります。要するに當時は建築上に於いては、西洋の影響は絶無に近かつたといふ外はありません。従つてかの日本の城廓建築に西洋の影響があつたに云ふ様な説も、私は同意致しかねるのであります。

四

さて次に繪畫、彫刻或は工藝品の類について申し上げます。これは建築を違ひまして、西洋で作られた原物を日本へ持つて來ることが出来る。おそらくは當時西洋から來たミシゴの宣教師は、例外なく何か此の種の作品を持つて來たに違ひないと思ひます。もちろん宗教上の祭儀に必要な小さい十字架、或はメダルさいふやうなものをも持つて來たに違ひない。またそれらのもの、中で今日でも多少残つてゐるのであります。そののみならず、日本から向ふに行つたミシゴの使節、天正十年に行つて十九年に歸つた有馬、大友、大村などの若い使節なども、その歸りがけには、澤山西洋のお土産を持つて來たに違ひない。大岡秀吉や關白秀次に歸つてから獻じた品物がいろいろ書いてありますが、それは表面その宗教的でない品物ばかりであります。併し、實際宗教的の品物、例へば畫像や小さい彫像の類なきをも持つて來たに相違ない。私は想像するのであります。現在でも西洋から歸つて來る人々は税關に見せたり、書き上げたりする品物以外に、澤山持つて歸るものがある、ミ同じやうに、或はもつミ公然ミ、これらの人々は宗教的美術品を澤山持つて歸つたに相違ないと思ひます、そしてそれが日本に來て「モデル」になつて、だんだん新しいものが作られたさいふこも十分豫想することが出来るのであります。

また、これは日本に持つて來たものではありませんが、多少當時の繪畫ミ關係があるから此處に申し上げておきますが、彼の有馬、大友などの使節がローマに行つたミきに、丁度グレゴリー十三世が死んで新しい法皇シクスマス五世が即位しました。その法皇の即位の式に「プラチカン」から「ラテラノ」の寺に行列を作つて出かけた式がありました。その時の行列の中にこの四人が珍らしい日本の服装をして遺入つて行つた。その光景が「プラチカン」の圖書館の大廣間の壁畫に現はれてゐるのであります。その行列がうね／＼續いてゐるその中に、四人の日本人が馬に乗つてゐる。何分壁畫は少し遠いミシゴに高く描かれてゐるのでよくは見えませんが、確かにこの時の光景を描いたものであるさいふので、日本人が「プラチカン」へ見物に行くミ、必ずその寫眞を吾々に勸めるのであります。又この連中がローマからアシジ、ロレットミ東海岸からベニス、ヴェネチエンツアなミイタリー國內を旅行したが、到る處で大歓迎を受けた。ベニスでは當時「ルネッサン

ス」後期の繪の大家チントレット、これはえらい人でミケランヂエロ、ラファエル、チ、アンなどに次ぐ人でありましたがそのチントレットをしてベニスの政府が四人の使節の肖像畫を描かしました。それがため二千デユカットといふ揮毫料を拂つてゐるこゝが、當時の文書に出て居ります。近年日本から行く人が、この繪がこゝに残つてゐるか、歴代の市長の肖像と同じミミに掲げるこゝにしたミ書いてあるが、ミも一向に見當らぬのは惜しいこゝであります。

次に伊達政宗の使節支倉六右衛門が行つたとき、それは慶長十九年に出發して、元和三年に歸つて來たのでありますがこの支倉の持つて歸つた品物は今日伊達家に澤山傳はつて居ります。その中の一部分がこの展覽會に過日出品されましたあの多分ローマで描かした支倉自身が合掌してゐる肖像であります。その外法皇パウロ五世の肖像もあります。これらは筆者はわからぬが、定めしかなりな畫家に描かせたものと思ひます。かくの如くその當時ミにかく文藝復興期の繪畫の「オリヂナル」が日本に這入つて來たといふこゝを吾々は想像するこゝが出来るのであります。そしてそれによつて日本の繪師がそれを模倣したこゝもあつたといふこゝを、吾々は想像して差支ないと思ふのであります。また多數の宣教師のうちには、繪の心得もあり、彫刻も少しはやるこゝいつた人もをつたかも知れません。彼のウァリニヤーニ師が九州有馬に住まつて子弟を集め、宗教教育以外繪畫、彫刻、樂器、時計などの作り方まで教へたといふこゝが宣教師の年報に見えてゐるが、それらのこゝも教へてつたこゝが分ります。さうせ専門家を養成するのではないが、多少さういふ心得のあるものを養成し、日本布教の實際に役立つやうにしたものと思はれます。それで又その宣教師の通信中に、日本の學生の中には繪畫、油繪、(デイステムバーの繪も)或は彫刻も長足の進歩を示し、ローマから輸入された繪畫や版畫などを巧みに描寫したといふこゝが報告せられてをります。(一五九二年年報)さういふ風に美術工藝的教育も多少やつたのでありますから、日本において日本人自身が、西洋風の繪畫を多少描くに至つたといふこゝを想像し得らるゝと思ひます。

このこゝについてはこれ以上私は多く申しませぬ。それはすでに澤村君が前にこの邊のこゝを詳しく述べられたと思ひますので、たゞさういふもの、繪の例として、日本人が西洋の繪畫や版畫の「オリヂナル」の「モデル」を使つて、西洋

風の畫を模寫したと思はれる例として、攝津高槻在の東氏の家にあるサヴェイエル聖人の肖像畫及びマリヤ十五玄義の圖、ロヨラミザヴェイエルの畫像、その外長崎浦上の天守堂にあるマリヤ十五玄義の圖などを挙げたいと思ひます。是等は皆確かに日本の繪具を使つて、日本紙の上に描いたものでありまして、西洋の「オリヂナル」に模寫したものに相違はありませぬ。私はさういふ風の繪が當時日本人の手によつて作られたことを想像するのであります。しかしこれらは純粹の宗教的の繪以外に、多少非宗教に直接關係のない「フロファン」な繪が残つて居ります。例へば神田勇衛家に所藏されてをる西洋風俗畫、或は松平子爵家に所藏されてをる西洋帝王騎馬の圖などはその一例であります。これらの宗教畫以外のものも矢張り日本の繪具で日本の紙に描いてあり、手法の上にも多少日本化したところも見えるのでありまして、日本人が描いたものと思はれるのでありますが、なかなか巧くてきてをる。近頃の畫家が日本の材料を以て西洋畫を模倣しても、これ程はよく出來てゐないかと思はれる位であります。

又此の展覽會にも寫しが出て居りますが、京都の寺から出たころの日蓮宗の坊さん、慶長十三年になくなつた日教上人の肖像。その肖像などはまるで西洋の肖像畫のやうに、巨細に陰影をつけて頗る寫實的にできてゐる。よくでこぼこが現はれてゐる。これなどはよほど西洋畫の影響を受けてをる一例であります。實は是はむしろ例外といふべきものでありまして、當時の日本畫、繪畫の全體が西洋の影響を受けたかといふに、まだその時分は殆んど受けてゐないといつても差支ないに、私は信するのであります。併し徳川時代の末期になりますと、今度は長崎から這入つて來るオランダの影響によつて、前の切支丹の影響とは別に、新しい系統で以て西洋の畫風が日本に影響いたしました。そしてかの岡山應舉の如き、その他浮世繪師などが、西洋の遠近法を使ふにふとになり、日本畫全體に大なる影響を及ぼしたのであります。この徳川の初期におきましては藝術上の影響は甚だ少なく根本的のものはないものであります。なほ先きに言ひ落しましたが、此の徳川初期において西洋風の畫を作つた人に、記憶す可き人の名前が一つあります。それは島原の亂に籠城した山田右衛門作といふ人です。これは大そう繪の巧い人で、城が陥つてからも許されていろいろな繪

を描いた、時には佛畫まで描いたといはれて居ります。ミにかくこの山田右衛門作といふ人は當時の西洋畫風の代表的作者であるといつても差支ないと思ひます。したがつて、この時分の古い西洋風の畫は大抵右衛門作の作にして今日も傳へられてゐるからであります。

五

それから次ぎは彫刻物でありますが、元來西洋では主として大理石の彫刻が行はれ、木彫は之に比し少ないのであります。尤も「ルネッサンス」時代フロレンスあたりでは木造の肖像彫刻も頗る進んでゐましたが、當時宣教師なきが持つて来るやうなものミすれば、大きな木彫は到底持つて來られない。たゞ小つぽけな木彫の耶穌の像ミか、マリヤの像ミかさういふもの、或は金屬製の小さな像であつたに相違ありません。たゞ、に殆んど唯一の大きなこの時分の木彫が日本に残つて居ります。それは彼のオランダの船の船首の裝飾であつたミこの貨狹様、ミはれるものであります。これは今度の展覧會に出てをりませぬが、東京の博物館に出品せられて居るが、下野足利在のお寺にあつたものであります。これは彼のウキリアムアダムス、即ち三浦安針が乗つて來たオランダの船にあつたものであります。これについては多分既に他の講師から詳しく述べられたと思ひますが、この船は「エラスムス」ミいつた船で、その「エラスムス」改め「リーフデ」號の船にあつたエラスムスの像であつたミが、村上博士や新村博士の御研究によつて分りました。まここに粗末な船の飾で、大したものではない、おそらくは船大工なきが作つたものでありませう。しかしミにかく西洋風の大きな木彫ミして頗る面白いものであります。これは近頃オランダから懇望して譲つて貰ひたいミ、頻りに交渉して來たさつてあります。

これは船の飾でありますから、稍々大きな彫刻が日本へ渡つて來たのであります。手に持つて來るものミしては、到底こんな大きな彫刻は大がサで持つて來られないのであります。小さい彫刻物になりますミ、之に反して随分澤山這入つ

て來たに違ひありませんが、其の二三の例を以ては、かの水戸の徳川家や攝津高槻在の大神氏の家に傳へられてゐる礎上の耶穌の像であります。これはその手法からいつても、何うしても西洋で作られたものこそ可きでありませう。斯くの如き彫刻がまた日本に於いても、だんだん模造せられ、自から彫刻全體にも多少影響したことを察せられますが、元來彫刻物におきましては、題材に關係なく其の手法だけから之が西洋的のものであるか、將た日本在來のものであるか、區別することはなかなか六ヶしいのでありますが、大體に於いて西洋風の手法は切支丹の使用した宗教的造像の上に限られて、他の日本の彫刻には殆んど影響がなかつたものにして宜敷いかに信するのであります。但しこのほかに織物もか刺繡も、或は小さな金工の類においては、原品が澤山西洋から輸入されることも、日本においても之を模倣して、盛んに作られたに違ひないと思ひます。何となれば當時ザグエル聖人が日本に來てから百年も経たないうちに、キリスト教に改宗した日本人といふものは、宣教師の報告によるに、十五萬かになつてゐる。これはカナリ大きい數であります。宣教師などは嘘を吐かぬに違ひないから本當でありませうが、或は何もなく之を割引してその半分にしても大きな數であります。それであるから小さな「メダル」十字架或は會堂禮拜堂の莊嚴具たる織物、その他の工藝品がカナリ澤山作られたに相違ないと思はれます。

又かく多數の信者が各地に分布してゐる以上は、切支丹趣味といふものが、クリスチャンでないもの、間にも次第に行はれたに違ひない。今日も必ずしもキリスト教でない人でさへキリスト教に關係あるものを持つたり、或は田舎の人で西洋のことを何も知らぬものが、西洋的のものを持つてゐるやうに、多少さういふ風であつたかと思ひます。例へばこれは實際「クリスチャン」自身が用ひたものと思ひますが、彼の馬の鞍に西教の教名たるフランチェスコの略字 F・R・S の三字を時繪で叙所にしたもので、(細川忠興はこれを印章にして用ひました)或は又ポルトガル人の風俗繪を鞍や鎧に現したもので、如き、あ、いふものは、あるものはクリスチャン自身が使ひ、或ものはクリスチャン以外の人々も多少「クリスチャン」趣味の影響によつて使つたことも絶無でなかつたかと思ひます。しかしこれらの切支丹具のものは一切徳川初期殊に

家光の時代において、キリスト教を断然日本から斥け、非常に嚴重な禁教の令を布き、迫害を加へました結果、そんなものを持つてをては、生命に關係するから皆な棄て、しまふ。或は又隠密の間に信者が匿してしまつたのでありまして、兎にかく表面には全く影を潜めてしまひました。たゞし織物とか刺繍とかの工藝の手法そのものに影響した部分は、必ずしもその必要がないので、依然として日本の工藝界に残存した。こゝに、信じますが、此の方面のこゝは私は全くの素人でありますから、悉しく申し上げるこゝは出来ません。

なほこゝに美術といふほどのものではありませんが、多少像型的のものであるから申しますのは、それは墓石であります。元來日本の墓は御承知の通り、足利時代は大抵五輪石塔、或は板碑のやうなものでありましたが、近年キリスト教徒の墓が、段々京都附近や長崎あたりで發見されて參りました。これを見ますと約半數は在來の日本の佛教徒が用ひた板型の或は位碑形の墓であります。但しその上には俗名と共に「クリスチャン・ホーム」例へば「パウロ」か「まりや」かか彫つてあり、又慶長十何年とか、日本の紀年の外にかの耶穌教の聖人の日繰、例へば「サン・オノリウスの日」か或は「セント・トーマス、アポストルの日」をか書いてあります。たゞし其の碑石の形は從來の分と同じ型であります。然るに此のほかにもう一つ別の蒲鉾型の墓石があります。これは前の分の一例と共に京都大學から此の展覧會に出品してありますから御覽になつた。こゝに、存じますが、此の形は西洋の墓を眞似たものであります。西洋では石棺が古くから使用せられ、それが長い寢棺であるがその蓋のこゝところが、大體蒲鉾型になるのであります。日本で今まで發見せられたものは、皆な小さなものでありまして其の中に人間は這入れないが、こゝにかく西洋式の石棺の蓋を模した墓石の形であります。かういふものは支那の北京の西直門外棚欄兒の天主堂附屬墓地にある明末のセスイツト教の利瑪竇とか、南懷仁とかその外の人々の墓にも見受けるのでありますが、日本のものでは一切人が中に這入れない、たゞの墓のしるしになつてゐるに反して、この北京のものに於いては、この中に人が擧るこゝが出来くらゐの大きさで、しかも蓋も身もあるのであります。それはこゝにかく斯る墓石の形に於いても、西洋風のものが日本に行はれるやうになつたのであります。それですから、

他の品物にも西洋風のものが追々こ入つたさいふを想像するに足るのであります。併し、それにしても要するにさいふに申しました通り、當時渡來の宣教師連中がまた日本へ來て日淺く傳道に熱心で、たゞ信仰そのものを植ゑつけやうさいふ態度で、會堂を壯麗にしやう祭壇を立派にしやうと、贅澤をいつてゐる時代でないから、その點において決して美術的ではなかつたのであります。それであるから従つて日本の美術に對して大した影響はなかつた。もしあつても若干皮相的影響があつたに止まるさいふはかないのであります。

六

以上私は日本へ渡來した當初の切支丹宗ミ、各種の造形美術ミの關係について、その概要を述べたのでありますが、最初に申したさいふこの西洋美術の影響さいふものは、その宗派の性質、その時分の傳道の態度なごから考へましても、非常に大なる影響を日本に及ぼしたさいふこを、豫期するこは出來なかつたのであります。しかしその影響は少なかつたにしろ、その影響たるや、歐洲の文藝復興期の藝術の影響でありました、それですから日本も大きくいへば、西洋の文藝復興期の文化の影響の一端を受けたさいふつてもよろしいでせう。

さいふころが私はこ、に日本に新しい宗旨が這入つて來た歴史を回顧して見ますと、耶穌教よりも約一千年前に佛教が、日本へ這入つた時はさうであつたか。……この時におきましては、朝鮮を通じて日本へ這入つて來た印度支那式藝術が、如何に滔々として流入し、今迄には全く見るこが出來なかつた堂々たる伽藍の建築が建立せられ、また佛像、佛畫が製作せられて、この新宗教ミ伴つて輸入せられた美術の勢力の大なるかに驚かれるのであり、その影響さいふものは、單に佛教そのものに關係ある方面ばかりでなく、日本人の生活全體に非常な影響を及ぼしたものであつたさいふとは、勿論誰れ人も知つてをるさいふの顯著なる事實であります。さいふころがその千年以後に渡來したさいふの新しい宗教切支丹は精神的方面に於いて非常なる影響は與へたかも知れませんが、その美術上の影響に至つては殆んご之ミ比較するに足るものがない

いひがあります。しかも此の切支丹の宗教の本國は、非常な美術的宗教が行はれてをつたのであり、又特に美術的の「ルネッサンス」時代であつたのであるに關らず、日本へはその美術の影響が甚だ微弱であつたのです。

これはさういふわけであるかと思しするに、これは實に判り切つた話で、今更くさくさしくいふ必要はないと思ひますが、その昔日本に佛教が這入つた時分には、われわれは何ら進んだ美術を有してゐなかつた。實にプリミチヴな日本であつたのであります。建築においても、繪畫においても、彫刻においても、何ら優れたものも持つてゐなかつたのであります。建築の如きも、極く簡素なる今日の伊勢大神宮の如き、あゝいふ類の簡素なものか、或は單に小屋がけの類のものに過ぎず、また彫刻の如きもたゞ埴輪土偶の類を有して居つたに過ぎないのであります。かういふ處へ佛教が這入つて來たのですから、宗教その者は別として、之に附隨して輸入せられた文化美術に對しては、心を空うして凡てを受け入れやうとしたのであります。それ故佛教に反對した物部守屋の如き人ですら、佛教に附隨してやつて來た文化に向つては感心もし、またそれを幾分採用したであらうと思ふ位であります。全くあの時には佛教を禁じやうと思つても、佛教と一緒に這入つた文化美術に對しては、之を拒否することは出來ない。これを受入れるについて、日本の受ける利益は莫大であつたのであります。

しかるに、一千年後彼の切支丹が這入つた時分には、日本においては既に非常な高等な藝術文化を持つてをつたのであります。佛教が這入つた時の場合の如く、必ずしもこれを模倣する必要がなかつたのであります。たゞせば建築の如きでも耶穌教の宣教師は正來のお寺の本堂を便つても説教が出来る。また耶穌やマリヤの像を描くにしても、在來の日本の畫案にやらせても、その類似のものが出来る。彫刻の如きも、日本の彫刻師にやらして見たならば、耶穌の十字架上の像でも何んでも出來たのであります。だから、よほぎその前の佛教の人つた時分には情勢が違つてをるゝ私は考へるのであります。おそらく當時有馬、大友、大村などの若い十八九歳の青年が使節として歐洲へ行つた時でも、又殊に支倉常長がローマやスペインなどを廻つた時にも、私どもが今日西洋を見物してその美術や物質的文明に驚くよりも、その驚き方が少

なかつたらうと思ふのであります。それで例へば建築にしても彼らは平素桃山式の立派な御殿を目撃して居つたのですから、西洋の建築の壯麗なものに對しても、大して驚かなかつたらうと思ふ。私は昨年スペインへ參つた時分に、支倉の泊つたミシゴのセヴィーヤの「アルカザール」宮殿を訪ねて、その部屋を見ました時につくづくさう思ひました。それは純粹の西洋建築でなく、「ムアア」式の建築で、金壁燦爛たるものでありましたが、支倉の日常出入して居つた政宗の御殿の如きは、定めし金壁燦爛たる桃山式のものであつたでせうから、支倉は決して此の「アルカザール」の建築なごに驚かなかつたらうと思つたのであります。さういふ風で日本の文化藝術さういふものは、頗る高等なものがあつて、西洋のものに驚く必要がなかつたのです。

この情勢はひゞり日本においてのみならず、支那に於いても同様でありました。支那は日本のあらゆる彫刻藝術の本家であるが、この本家においては矢張り明末清朝においてヂェスイツト派の基督教が這入つて、次第に擴がりましたが、支那人は彼ら宣教師が持つて來た美術や物質的文明には殆んど天文の機械時計の類なごの外には、何等驚嘆するごを要しなかつた。それに宣教師カステリオーネなんかは郎世寧の支那名を以て支那繪を書き出した。彼は西洋畫を支那に輸入したごいふよりも、むしろ支那畫を學んでそれを西洋吳く畫いたごいふ位でありました。さういふわけで、佛敎が日本へ始めて這入つた時の情勢ごは、非常に違つてをるごいふごを知らなければなりません。そして之が當時切支丹の藝術が、日本のそれに大なる影響を興へるに至らなかつた、根本的原因であつたのであります。

又私ごもがご、に考へたいごは、徳川の初期において、日本が國を鎖し基督教を禁壓しなかつたら、何ういふ結果を日本の美術にもたらしたか、又鎖國禁敎を實行した結果は何うであつたかごいふごでありますが、これについては辻博士がすでに申されたご、は思ひますが、私自身獨立の立場からこのごを考へて見ますご、もしあの時鎖國禁敎が行はれなかつたならば、今申したやうに當時日本においては高等なる文化藝術があつて、敢て西洋のものをさう摸倣する必要はなかつたのであります。矢張りその影響は微弱ながら次第々に深くなつて行つたに違ひない。そして吾々は徳川

末期において見る如き西洋風の繪畫か、油繪なども徳川の初期、中期頃からポツポツ現はれ出したのでありませう。ここに
 かく美術を以ては、あゝいふ風に基督教を斷然禁壓し鎖國を斷行したので、支那を除く外國の文化の影響は全くなくなり
 西洋の美術は其の根を絶たれることになりました。その結果日本において或は圓山四條派の如き、或は彼の歌麿、清長の
 浮世繪の如き、純粹の日本的の美術、その他あらゆる純粹なる日本の藝術文化といふものが發達し得たのであります。基
 督教の影響は少なかつたけれども、もし長く續いたならば、だんだんそれらのものが現はれて來て、純粹な文化藝術があ
 る様にこの三百年間に作り出されることはなかつたと思ふ。

それで私は日本の鎖國といふものは、全體としてこれだけの利益があつたか、それだけの損害があつたかといふことを
 ことに計算することはいたしません、とにかく純粹の日本的藝術といふものが産出されたのは、全くこの禁教以來二百
 數十年の間であり、もしも日本の文化——今日までにおいて産出された文化のうちで、もつとも誇るべきものが、美術で
 あるとすれば、この鎖國禁教の間に産出されたところの美術といふものが、そのうちの重要な部分を占めてをること私は
 思ふのであります。かく見るならば、日本の徳川三百年間の鎖國といふものは決して無用のものぢなかつた。吾々はその
 うちから重大なる利益を受けてをることいふことを知るべきが出来るのであります。但しこれを他の種々の方面を計算して
 かれこれ差引勘定すること、得てあつたか損であつたかといふこと、私にはよくは分りません。實際さういふことの計算は容
 易になし得るものぢやない。又それは多くは無用のことで、恰も死んだ子供の齡を算へるに同一のこと、思ひます。

つまり我々のたゞり行く歴史はたゞ一つ、一つの道しかない。その一つの極まつたところの歴史の道を行くより仕方
 ない運命を持つて居るので、尤も將來のことに於いて、我々は「ベスト」をつくして行くべきであります、——過
 去のことはあの時のかうした方がよかつた、あゝすれば宜かつたといふことを考へることは無用のことで、それはあゝす
 る外仕方がなかつたのであります。それ故私は、一つの事件の結果はさうであつたか、その利益のあつた結果はどれだけ
 かといふことを考へるべきであらうと思ふのであります。(完)

昭和四年十一月十五日印刷
昭和四年十一月二十日發行

開國文化(定價二圓)

複製を許さず

著作兼發行
兼印刷人

大 道 弘 雄

大阪市北區中之島三丁目三番
地株式會社朝日新聞社

大阪市北區中之島三丁目三番
地株式會社朝日新聞社

印刷所

大阪朝日新聞發行所

發行所

大阪市北區中之島三丁目三番地

株式會社 朝日新聞社